はじめに

古くて新しいテーマ。その一つが「地域づくり」です。この言葉には、これからの日本社会のあり方を考える上で重要なキーワードの一つに挙げられる必然性があります。

最近になって頓に使われ始めた言葉に「無縁社会」というものがありますが、この新語には、社会の存立の仕方として「社会らしくない社会」が普及していくという逆説が潜んでいます。かつての日本社会では、血縁や地縁をはじめとした諸々の「縁」により個人個人が相互に支えあうネットワークが機能していました。つまり、家族づきあい、近所づきあい、職場づきあいなどにより、誰かと誰かとがつながっていることが自然でした。しかし、自動販売機やコンビニエンスストア、さらにはインターネット通販などで買い物すれば、たいていのことが事足りる都市部では、特に人づきあいをしなくても十分に生活していくことができますし、一般に「田舎」と言われる地域も、この状況に似通ってきています。また、高齢化が進む地域では、外出がおっくうになったり不便になったりする人が増え、相互の行き来が減るなどして、昔ほどの親密な人間関係はなくなっています。

すなわち、諸々のネットワークとはほとんど関わりを持たないまま社会から孤立した状態で日々を過ごす人が増えてくるとともに、これらのネットワーク機能それ自体が弱体化しているのです。こうして、お互いがまさに「無縁」で生きる人たちで「社会」が構成されつつあります。この点で、「無縁社会」という言葉は、まさに時宜を得ています。

では、このような方向で未来社会が構成されていくことは、望ましいことなのでしょうか。結論的に言えば、否だと言い切ってよいでしょう。この状態を是認・黙認するわけにはいかないというわけです。とはいえ、社会を改めて作り直そうとする動きは、これまでどうだったのでしょうか。実は、それは今に始まったことでないどころか、地道な実践が、各々の地域社会の中でずっと続けられてきたのです。

故きを温めて新しきを知る。私が思うに、今の社会や教育界で意識すべきことは、この諺の意味を、具体的実情に基づいて思い起こすことです。あまりに身近で行われているために、その意義や価値に気づかれにくいことに焦点を当て直すべきなのです。「社会教育」と呼ばれてきた活動の中には、「地域社会づくりのための教育」とみなせるものが数多くあります。また、栃木県の場合には、「ふれあい学習」と呼ばれる実践が進められ、人と人とのふれあいを進めるとともに、学習活動を媒介とした「絆づくり」も進んでいます。

本書は、こうした意味での「古さ」を生かすことを試みつつも、そこにまさに「新しさ」を効果的に組み合わそうとしています。主たる構成として、基礎理論的なものと具体的方法の紹介とで成り立つ本書を、読者の皆様が有効活用されることを願ってやみません。

2010（平成22）年３月

栃木社会教育推進コンソーシアム協議会会長
宇都宮大学生涯学習教育研究センター准教授
佐々木英和